
春夏秋冬

桜桃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春夏秋冬

【Nコード】

N6901Y

【作者名】

桜桃

【あらすじ】

とりあえず、短編集です

『春』『夏』『秋』『冬』

それぞれの季節の中でうごめいていく恋心……。

『冬』 外降る雪のように・・・

ちらほらと・・・

雪が降ってくる。

東京では珍しいくらいに降る。

「ねえ、新一。」

「これだけ降ればつもるかな？」

窓にへばりついて聞く蘭に

新一は呆れた声を出した。

「いや、溶ける。」

「えー、なんでー？」

「雪は地温が低くなってからつもるんだ。」

「まだ、地温があたたかい東京ではつもらねえよ。」

「でも、アスファルトってすぐ冷たくなるじゃない。」

「アスファルトは冷たくても、
中の土があたたかったら意味ねえんだよ。
その土があたたかいせいで溶けるんだからな。」

「ふーん。」

じゃあ、今年のホワイトクリスマスは期待できないね。」

残念そうにつぶやく蘭。

「まったく、本当に女ってーのは
ロマンチックなのが好きだよな。」

「そりゃそうよ。
だって、見てるだけで心が癒される気分になれるでしょ?。」

「気分ね、気分。」

「新一の場合、気分もなにもないわ。」

一応、言っておくが

今年付き合い始めた2人……。

それでも以前と変わらず喧嘩。

「和葉ちゃん、新一が紳士的だとか言ってたけどどこをどう見たらそう見えるんだろ？」

私には不思議でたまらないわ。」

「嫌味が、それ。」

「さあね、そう聞こえるんだったらそうなんじゃないの。」

「おめーなあ。」

「大体、こんなに雪が降ってて感動しないなんて信じられない。」

「なんとも言え。」

「・・・コナン君だったときは、一緒に喜んでくれたくせに新一の格好つけ。」

「あのなあ、あれは子供のフリをしてたからで、本気で喜んでたわけじゃねえよ。」

「わかってるもん、そんなこと・・・。
でもなあ、新一最近意地悪だし。コナン君だったときのほうが良かったかも。」

冗談のつもりだった。

「んじゃあ、戻ってやろうか？」

「え？」

「さっき灰原にもらったんだよな。

これを飲めば戻れる・・・って。

ただし、もう二度とこの姿には戻れない。

まあ、蘭が望むならそのほうがいいかもな。」

新一は蘭に微笑みかけて薬を飲んだ。

「ちよつと、冗談なの！」

さっきのは冗談！！出して、出してよ！！

やだよ・・・確かに、コナン君との思い出に浸りたいって思うところもある。

でも、私が好きなのは新一だもん！」

「やーっと、本音を言っ たな？」

「え？」

新一はムクリと起き上がる。

「ちなみに、さっき飲んだのはただの栄養剤。もう一度毒薬作るなんてあぶねーこと、灰原はもう二度としねえよ。」

「・・・よ。」

「え？」

「なによ、なによ！
本気で心配したんだから！
新一のバカ！」

「わ、わり・・・」

「あ、謝って許される問題じゃないんだからね・・・
新一、今日のお夕飯抜きなんだから。」

「はあ？そりやねえだろ！」

「知らないわよ。
私をだました新一が悪いんでしょう？」

「大体、お前がコナンが良いとか言うのがいけねえんだろ！」

「なによー、全部私が悪いって言いたいのか!?!」

外の雪のように・・・

2人の喧嘩はやまなかった。

『冬』 外降る雪のように・・・（後書き）

とりあえず・・・

『春夏秋冬』という題名をつけたかった
桜桃です。

なんか、フツとひらめいた題名だったんですね。
使いたくて使いたくて・・・
うずうずしてました。

そして、今回！

短編集として書かせていただくことになりました。

皆様、宜しくお願い致します！

『冬』 あったまるから・・・

夏の暑さが嘘のように冷え込む日が続く。

東京の冬がこんなにも寒いのなら・・・

北海道の冬はどれだけ寒いのだろう。

「哀ちゃん？」

「吉田さん・・・」

「何か考え事？」

「ええ・・・まあ。」

「・・・哀ちゃんってミステリアスだよねえ。」

「え？」

「不思議な雰囲気です。
それが、哀ちゃんの魅力なんだけどね！」

にっこり笑う歩美に

つられて哀も笑う。

「哀ちゃん、コナン君が居なくなつて・・・
もう、一年だね。」

「そうね・・・」

「寂しいね。」

「ええ・・・」

「哀ちゃんは・・・コナン君が好き、だった？」

「え・・・？」

「1年生のとき・・・同じような質問、したね。
あのときと・・・気持ち、少しは変わってない？」

「あの時と・・・気持ちか？」

「うん。」

歩美はね、少し・・・変わったよ。

大好き、コナン君！じゃなくて・・・

少し、大人目線で見れるようになったと思う。」

「大人・・・」

「絶対結ばれる！

っていうただの空想を浮かべてるだけじゃなくて・・・
なんか、普通に・・・好きだなあ。って。」

胸に手を置いて、歩美は話す。

「コナン君が・・・好きだなあ。

って・・・思ったら、ほんのり心があったまるんだ。」

「・・・そう。」

「コナン君ってさ・・・

ココアみたいだねえ。」

「え？」

いきなりな言葉に哀は聞き返してしまった。

歩美はポケットから自販で買ったココアを2つ取り出す。

「さっきね、買ったの。」

あったかいよ。哀ちゃん、どうぞ。」

「・・・ありがとう。」

歩美は哀に渡すと缶を開けて、

飲み始める。

哀はそっと、ココアを握りしめた。

「ほら・・・」

「ココアって飲むと優しい気持ちになるでしょ？
そっと・・・心に寄り添ってくれる。」

「コナン君って、そんな感じじゃない？」

「・・・そうね。」

「一番悲しいときに・・・傍に居てくれるわ。」

「うん。」

「コナン君ってずるい・・・」

「私もそう思うわ。」

「勝手に人の心を盗んでほしくないわよね。」

「うんうん!」

「ま・・・それは勝手な言い分でしょうけど。」

「・・・うん。」

「哀ちゃん・・・」

「なに？」

「歩美、哀ちゃんの傍にいていいよね？」

「え？」

「哀ちゃんまで、コナン君と同じように居なくならないよね？」

「吉田さん・・・」

「歩美、哀ちゃんずっと居たいから・・・」

「・・・ありがとう。」

心配しなくても、私はどこも行かないわよ。」

「よかった・・・」

胸をなでおろしたようにホッとする。

「哀ちゃんみたいに頭が良かったら・・・」

外国に行ったりしちゃうのかな、って不安だったの。」

「・・・」

「ずっと親友で居てくれるんだよね？」

「ええ。」

哀の答えを聞くと

歩美は嬉しそうにまた笑った。

『冬』 あったまるから・・・（後書き）

恋話なのか・・・友情話なのか・・・

全然わかりませんが・・・

読んでくれてありがとうございます!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6901y/>

春夏秋冬

2011年11月26日19時46分発行